



JAPAN FOUNDATION
國際交流基金

2013 年度日本国际交流基金知识交流资助项目

中日韩比较文化研究

“首届中日韩比较文化研究国际学术研讨会”大会论文

主 编 全昌焕

Ⓛ 辽宁人民出版社



JAPAN FOUNDATION
國際交流基金

2013 年度日本国际交流基金知识交流资助项目

中日韩比较文化研究

“首届中日韩比较文化研究国际学术研讨会”大会论文

主 编 全昌焕

副主编 闫雪雯 于丽萍 王 晶 任卫平

编 委 王贺英 徐金凤 赵春英 张晓宁

权海顺 李凌云 张 军

©全昌焕 2014

图书在版编目(CIP)数据

中日韩比较文化研究：“首届中日韩比较文化研究
国际学术研讨会”大会论文 / 全昌焕主编. — 沈阳：
辽宁人民出版社, 2014.3

ISBN 978-7-205-07936-9

I. ①中… II. ①全… III. ①比较文化—中国、日本、
韩国—文集 IV. ①G04-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 045018 号

出版发行：辽宁人民出版社

地址：沈阳市和平区十一纬路 25 号 邮编：110003

<http://www.lnpublish.com.cn>

印 刷：沈阳海世达印务有限公司

幅面尺寸：210mm×285mm

印 张：19

字 数：400 千字

出版时间：2014 年 3 月第 1 版

印刷时间：2014 年 3 月第 1 次印刷

责任编辑：李顺英 孙 雯

装帧设计：刘 亮

责任校对：孙 雯

书 号：ISBN 978-7-205-07936-9

定 价：58.00 元

前 言

辽宁，一颗人杰地灵的“北方明珠”。沈阳，一个古韵犹存的古都。沈航，一个书香漫散的高等学府。

金秋十月，硕果累累的季节，也正是知识存储的吉时。在日本国际交流基金、中国日语教学研究会、日本国驻沈阳总领事馆等单位的大力协助下，2013年10月11日，由这一充满文化知识气韵的高等学府——沈阳航空航天大学主办的“首届中日韩比较文化研究国际学术研讨会（2013年度『第一回中・日・韓比較文化研究国際学術シンポジウム』）”隆重召开。经过两天紧张热烈的研讨与交流，10月12日，大会圆满落下帷幕。

参加本次大会的海内外研究者共100余人，其中中日韩三国学界著名专家共20余人，加上一般教师、学生等旁听人员，参会人数多达300余人。

《中日韩比较文化研究》汇总了中日韩三国学界名家的论文10余篇以及其他代表的论文50余篇。

近几年，比较文化研究的国际性交流日益频繁。然而，研究课题大都聚焦于各自的研究领域，对相关学科的关注则不多见。尽管中日韩之间的学术交流不断地向前发展，然而立足于亚洲以及全球的比较文化研究成果的积累还是远远不够，并且仍存在不少问题。首先，多国之间的共同研究依然处于相对落后的局面。其次，跨学科的研究还处于起步阶段。一直以来，比较文化研究存在宣传力度不够、研究成果服务于社会的工作开展得不够深入等诸多问题。在东亚地区，比较文化研究的相对落后成为阻碍东亚各国相互理解和交流的一个巨大障碍。我们深深地感觉到，对亚洲的未来而言，基于跨学科的研究视角是非常重要的，这是历史发展的必然结果。因此应该进一步加强各国之间的相互交流，为进一步开拓东亚地区跨学科研究道路而努力。

《中日韩比较文化研究》集中体现了会议宗旨，即着重强调跨学科研究，而不把文化研究看作是一个孤立的研究领域。包括文化与语言、文化与文学在内，应该加强与各学科之间的沟通，逐步拓宽研究领域，使研究的内容从单一学科扩展到与其他学科交叉的领域，这样才能提高比较文化研究的质量，才能使研究为文化发展做出更大贡献。

同时《中日韩比较文化研究》还集中反映出比较文化研究的新成果。我们认为，应该通过多国间的共同研究来进一步提高比较文化研究的社会关注度。以往的研究，大都侧重于各国研究人员比较感兴趣的个别领域，而《中日韩比较文化研究》提倡并展现出对共同研究课题的关注与深思，这将对扩大研究成果的国际影响产生巨大的推动作用。

在大会期间，我们邀请到20多位中日韩三国学界著名学者。他们亲临会场给我们点燃了指路明灯，我们有幸一睹各路学者的治学风采，聆听到求学艰辛之经验以及获得成功之风风雨雨。我们深深感觉到，探索的道路从古至今都是充满着无数的荆棘，需要我们去披荆斩棘，付出辛勤汗水才能到达成功的彼岸。

独学而无友，则孤陋而寡闻；勤学而交流，则博学而睿智。“金风吐睿，锦囊探计”也是本次研讨会以及《中日韩比较文化研究》的基本理念。我们相互探索，相互学习，博观而约取，厚积而薄发，必将获得一个双赢的美好结果。

这次活动的主要资金由日本国际交流基金提供，本次大会之所以获得巨大成功，在学界被传为佳话，日本国际交流基金的大力支持功不可没。在此代表会务组全体人员以及来自东亚中日韩三国的学者，谨向日本国际交流基金表示由衷的感谢。

通过这次活动，中日韩各位学者目睹了辽宁人的拼搏追求，又重新认识了辽宁，感受到沈阳航空航天大学奋发向上、只争朝夕的热烈追求。《中日韩比较文化研究》的出版发行不仅仅是知识的交流、文化的碰撞，也是共同求发展的努力的结晶。

参加本次大会的专家特邀嘉宾有：教育部日语教学指导委员会主任、中国日语教学研究会名誉会长、天津外国语大学校长修刚教授，教育部日语教学指导委员会原主任、中国日本文学研究会会长、上海外国语大

学原常务副校长谭晶华教授,中国日语教学研究会名誉会长宿久高教授,中国日语教学研究会常务副会长、东北师范大学徐冰教授,东京大学名誉教授、昭和女子大学大学院特任教授池上嘉彦先生,东亚日语教育·日本文化研究会会长藤井茂利先生,韩国日语日文学会会长、东亚日语日本文化研究会副会长、新罗大学崔光准教授,韩国檀国大学教授、日本研究所所长、韩国日语日文学会原会长、东亚日语日本文化研究会副会长郑滢教授等20多位著名专家。

本次大会还得到日本国际交流基金、中国日语教学研究会、日本国驻沈阳总领事馆、东亚日语教育日本文化研究会、长春出版社外语分社、卡西欧上海贸易有限公司、上海外语教育出版社、外语教学与研究出版社、日本九州外国语学院等机构的大力支持,在此一并鸣谢。

“欲渡黄河冰塞川,将登太行雪满山”。2013年“首届中日韩比较文化研究国际学术研讨会”已经成为过去,其间所经历的所有一切仿佛就在昨天,一幕幕浮现在眼前,难以从记忆的长河中抹去。“长风破浪会有时,直挂云帆济沧海”。“首届中日韩比较文化研究国际学术研讨会”将以《中日韩比较文化研究》画卷宣告完成其历史使命。

当我们荡起回忆的双桨时,必须牢牢记住为本项目付出辛勤劳动、做出无私奉献的各位领导以及前辈同行。

首先,在这里谨向亲临会场并给予我们鼓励和支持的日本国驻沈阳总领事馆大泽勉总领事以及平岛隆幸副领事表示由衷的谢意。

其次,向日本国际交流基金日本研究与知识交流部清水顺一郎部长为首的野口裕子、二子登等相关人员表示由衷的感谢。

另外,在繁忙的公务中,沈阳航空航天大学陈保东常务副校长以及王琦副校长抽出宝贵时间参加本次国际会议,给予最大支持,谨向两位校长表示由衷的谢意。

向沈阳航空航天大学外国语学院院长李丹莉教授表示由衷的谢意。为了本次活动的成功,李丹莉教授运筹帷幄、顾全大局、雷厉风行,在人力、物力等各个方面,给予项目执行负责人最大的支持,借此机会再次向李丹莉院长表示深深的谢意。

与此同时,向尊敬的魏承杰教授表示由衷的谢意。自从2011年8月筹备本次活动开始,一直到今天,魏承杰教授披星戴月、夜以继日地工作,向项目执行负责人伸出最热心的双手。2012年的严冬,其间一路走过来的含辛茹苦至今历历在目,终身难忘。

借此机会,向沈阳航空航天大学科学技术协会秘书长夏秀峰教授表示感谢,自从活动筹备以来,一直关心本项目的进展,并给予鼎力相助,使我们深受感动。

历经两年时光,承蒙中日韩学界前辈厚爱,项目各项任务圆满完成,谨致谢忱。

项目执行负责人 全昌焕

2014年1月17日于沈阳

“首届中日韩比较文化研究国际学术研讨会”以及《中日韩比较文化研究》顾问

(一) 中方顾问

1. 教育部日语教学指导委员会主任、中国日语教学研究会名誉会长、天津外国语大学校长 修刚教授
2. 教育部日语教学指导委员会原主任、中国日本文学研究会会长、上海外国语大学原常务副校长 谭晶华教授
3. 中国日语教学研究会名誉会长、吉林大学外国语学院原院长 宿久高教授
4. 中国日语教学研究会会长、北京日本学研究中心主任 徐一平教授
5. 中国日语教学研究会常务副会长、东北师范大学 徐冰教授
6. 中国日语教学研究会常务副会长、吉林大学外国语学院院长 周异夫教授
7. 中国日语教学研究会副会长、大连大学副校长 宋协毅教授
8. 吉林大学外国语学院 于长敏教授
9. 大连外国语大学日本研究所所长 陈岩教授
10. 广东外语外贸大学东语学院院长 陈多友教授
11. 《人民中国》杂志总编辑 王众一先生
12. 外语教学与研究出版社委员会主任 薛豹先生
13. 南京信息工程大学语言文化学院 侯锐教授
14. 上海财经大学外语系 尤东旭副教授

(二) 日方顾问

1. 东京大学名誉教授、昭和女子大学大学院特任教授 池上嘉彦先生
2. 东亚日语教育·日本文化研究会会长 藤井茂利博士
3. 别府大学 松本泰丈教授
4. 名古屋大学大学院国际语言文化研究科副研究科长、教授、评议员 玉冈贺津雄教授
5. 大分大学 田畑千秋教授
6. 早稻田大学 吉原浩人教授
7. 熊本大学 铃木宽之副教授
8. 新潟大学大学院现代文化研究科 朱继征教授
9. 日本九州外国语学院 马越雪夫理事长
10. 演说家 笈川幸司先生

(三) 韩方顾问

1. 韩国日语日文学会会长、东亚日语教育·日本文化研究会副会长 新罗大学 崔光准教授
2. 韩国日语日文学会原会长、东亚日语教育·日本文化研究会副会长 檀国大学日本研究所所长 郑滢教授

参加本次《中日韩比较文化研究》编写工作的人员

全昌焕	沈阳航空航天大学外国语学院日本语言文化研究所所长	教授	博士（文学）
闫雪雯	沈阳师范大学外国语学院日语系原主任	教授	
于丽萍	辽宁大学外国语学院副院长	教授	
王 晶	辽宁大学外国语学院日语系原主任	教授	
任卫平	辽宁大学外国语学院日语系主任	教授	
王贺英	沈阳师范大学外国语学院日语系	副教授	
徐金凤	沈阳航空航天大学外国语学院日本语言文化研究所	副所长	副教授 博士（哲学）
赵春英	辽宁大学外国语学院日语系	讲师	
张晓宁	沈阳师范大学外国语学院日语系	教授	
权海顺	沈阳航空航天大学外国语学院日语系	副教授	
李凌云	沈阳药科大学	副教授	
张 军	沈阳工业大学外国语学院日语系主任	副教授	

目 录

前言	1
自然と文化の記号論	池上嘉彦 1
日本文化研究的态度与方法	宿久高 7
从莫言获诺贝尔文学奖看中国文化走向世界的文学翻译	谭晶华 10
中日同時通訳の訓練から見る両国の文化知識獲得の重要性	宋協毅 15
アジアの歩みはどうなるのか	陳多友 19
中日交流史中的文化交流	周昇夫 25
文化研究の学際性について	松本泰丈 30
『万葉集』と古代韓国、中国	崔光準 36
韓国における日本近世古典人文学資料の翻訳出版および研究の動向	鄭 滢 44
内容類型学からみた琉球方言	田畑千秋 55
“蝗军”和“女人”的证明	于长敏 61
翻訳に深く関わる文化について	陳 岩 66
中国における日本映画の受け入れと変容	王衆一 70
談話の焦点について	朱繼征 73
中日服飾色彩に関する比較	何 躍 84
「どうも」に関する一考察	閻雪雯 87
中日両言語を使用したE-mailの交流プロジェクト	楊 虹 劉 娜 金錦珠 91
日本漢字機能の重層性について	樺海順 97
ことわざに対する語用論的分析	石金花 101
異文化間コミュニケーションにおける中日言語行動の比較	徐二紅 105
「恥知らず」に関する一考察	李雄傑 109
日语语言文化特征浅析	张娅萍 113
日语教学过程中常见的语用偏误类型与分析	钱红日 116
客家方言与日语的相似性比较研究	何明清 121
基于“多元文化多种语言网络共同体”的外语学习平台构建研究	王 冲 森山新 126
日本語教育における文法指導の模索	張 倩 張 軍 129
動物に関するメタファーの中日比較	齊小寧 133
「テアル」と“着”“了”の日中対照について	邢俊傑 136
以“三美”思想探讨日本俳句的翻译形式和意蕴	崔德军 139
浅析中日翻译中的习惯用语表达	于 娜 145
中日両言語の挨拶言葉の対照研究	曲鳳鳴 149
传统文化视野中日语专业教学模式改革研究	张红艳 152
現代日本漢語の促音化について	金鮮花 155
逆接を表す「モ」と係助詞「モ」との連続性について	孫宇雷 158
同時通訳授業時に見られる誤用についての分析	張晨曦 徐金鳳 張秀強 163
効果的な聴解授業に関する一考察	趙春英 170
談話における文末の「って」の機能について	劉 琳 176

ESP理论视角下的日语专业教学探索	施万里	张余辉	179
创新教育在《高级日语》教学中的运用初探	王娟		182
关于日语“いま”与汉语“现在”的对比研究	王昕		185
自動詞使役文と他動詞文の違いについて	王茜		189
談話における「(それ)では/(それ)じゃ」の話題展開機能	黄桂峰		193
基于支架理论的日语听力教学研究	李晓霞	徐义红	197
日语省略现象的文化原因	王胜波		201
田山花袋眼中的日俄战争	董微		204
论西行法师咏秋和歌的艺术特色	王贺英		207
日本の初期読本の中国『三言』への利用手法	顔景義		211
唐代传奇小説『杜子春伝』と芥川の『杜子春』の比較研究	楊瑞娜		214
论佐多稻子文学中的民族意识	王晶		217
《浩瀚的都市》与《天使》的人物形象及艺术表现	任卫平		220
“异端”之美与“物哀”之花	张晓宁		224
中日古代女性文学の表現への一考	孫佩霞		227
自然への愛着に満ちた宮沢賢治の心象世界	孫妍		231
从《暗夜行路》看志贺直哉的女性观	李芸德		235
飛び込む音のころ	田軍		238
浅析光源氏青少年时期的女性观的形成	王莘盈		241
从《万叶集》中富士山形象看古代日本人的崇山理念	樊丽丽		244
近藤直子与中国文学	王霞		247
现实：莫言与日本	滕野		252
佐久間象山の「東洋道德、西洋芸術」をめぐって	馬保彪		255
『父の詫び状』に見る父親像	牟海晶		258
古代中日文化交流の使者円仁	李凌雲		261
从古代神话看不同的中日社会文化	吕娜		264
千代野禅师考	徐义红	李晓霞	267
“关东州”的教育行政机构	李延坤		271
战时日本报界视野下的“满洲移民”运动	孙继强		275
日本の高齢化現象から見る中国の高齢化課題	朴正龍		279
日本の全民食育运动带给中国的启示	刘杰慧		284
高齢者の自立生活とサポート・ネットワークについて	李東輝		288
附 录			293
1. 知的交流會議助成対象事業			
2. 日本国际交流基金会 Japan Foundation			
3. 日本国际交流基金			
后 记			294

自然と文化の記号論

東京大学／昭和女子大学 池上嘉彦

「ことば」と「ことばらしいもの」

われわれの文化的な営みには「ことば」以外の「ことばらしいもの」がいろいろと関与している。そのようなものの或るものには、比喩的な意味で「ことば」という名称が適用されている。例えば、「身振りの言語」とか、「コンピューターの言語」、「花ことば」などである。

ひとくちに「ことばらしきもの」と言っても、その「ことばらしさ」はさまざまである。まず「ことば」にもっとも近く位置するものとして、「モールス信号」とか「手旗信号」のようなものがある。これらは「ことば」をふつうの音声や文字であらわすことの直接の代用をしているものであり、もっとも直接的な意味で「ことば」から派生したものである。「花ことば」というようなものになると「ことば」への直接の依存性はいくらか低くなる感じである。これらは「ことば」に全面的に依存している存在であり、「ことば」がなくなれば、それらの信号から成るメッセージは解読不可能となり、もはや機能し続けられなくなる。

この種のものに次いで「ことば」に近く位置しているものと言え、何らかの特定の情報を間違いなく伝達するという目的で人工的に作られた記号体系であろう。例えば、「コンピューターの言語」とか「交通信号」のたぐいである。前者では受信者が機械であり、後者では発信者が機械であるということからも想像がつく通り、この種の記号体系による伝達は偶然の故障でもない限り、完全にコードに従って文字通り「機械的」に行われる。伝達は「理想的」に行われるが、伝えられる情報は一定の限られたものだけである。まさにその理由からして、それは「ことば」でなく「ことばらしいもの」なのである。

コードの明確さということから言えば、「制服」などもそうである。ある職掌にかかわる人であることを明示するのが「制服」の目的であるから、コードは当然明確でなければならないわけである。しかし一方、「制服」の場合は「ことば」のいわば「語彙」に相当するものだけで「文法」に当たるものはないから、その意味で「ことば」らしさは、かなり減ることになる。

人間のするさまざまな「身振り」の中でも、例えば「礼儀作法」として社会慣習となっているものは「ことばらしいもの」としてすぐ認めることができるし、場合によっては、現に「ことば」と相補するような働きをすることがある。例えば「こんにちは」ということばによる挨拶代わりに（特にふつうの声では聴きとり難いと思われるような場合に）、「お辞儀」をすることによって挨拶をすることもできるわけである。このような「礼儀作法」については、ちょうど「ことば」に使い方が決まっているのと同じように、どのような場合にすることが社会的に決まっている。だから西欧の人と接触する日本人なら、どのような場合に「握手」をするものであるか（例えば、相手が女性なら相手のほうから手を出さない限り握手を求めてはならないとか）を心得ておかななくてはならない。しかも同じ西欧でも握手をする場合の条件や頻度は、国によって少しづつ違いうるものである。

「意味を持つ」ことの拡張

以上見たような例は、「ことばらしいもの」という概念が比較的抵抗なく適用できる場合である。それは、そのようなものはもともと表現や伝達を意図して仕組まれたものであり、したがって多かれ少なかれ明確なコードによってそれぞれに対応する意味が社会的に取り決められているからである。

ここで「ことばらしいもの」という概念をもう一步広げてみよう。一つの方向は、表現や伝達の意図と

いう条件を取り除いてみるということである。

「制服」が「ことばらしいもの」として解せるということはすでに見たが、ここで「制服」でなく、一般に「服」あるいは「衣服」というものにまで拡張して考えてみよう。われわれは「服」とか「衣服」と呼ばれる対象が大体どのようなものであり、何をするものであるかを知っているつもりである。われわれ自身が属する文化圏に関する限りならば、確かに一応そう言えそうである。しかし、かりにまったく異なる文化圏に初めて投げ込まれた場合にでも、果たしてその文化圏で「衣服」として通用しているものを間違いないくそれとして認定できるであろうか。必ずそれができるとは、とても言い切れないのではないかと思われる。例えば、ある文化圏で身体のある特定の部分を覆うものとして「衣服」の一部であるものがあったとしても、われわれはそれは単なる「衣切れ」であって、とても「衣服」とは思えないかも知れない。しかし、例えばそれが暑い地方では腰のあたりに巻くものであるとか、あるいは別の地方で女性が眼以外の顔を覆うのに用いるものであるとすると、それぞれの文化圏では、はっきりとした「衣服」の一部である。異なる文化圏に属しているわれわれには、それが〈衣服〉という文化的な「価値」を持った対象であるということが分からないというだけのことである。

この状況は、われわれが自分の母国語であれば「ことば」の意味が分かるけれども、知らない外国語であれば「ことば」であるはずのものでも意味が分からないという状況にたとえることができる。なじみのない文化圏の衣服もことばも、その文化圏では、それぞれどのような意味を持つものかが文化的に決まっている。

すぐ分かる通り、このような場合についても「意味」ということを言うとしたら、「意味」ということばの意味がすでに拡張されているわけである。「文化的な意味」という言い方の代わりに「文化的な意義」とか、「文化的な価値」というような言い方をしてみることもできるであろう。いくらか学問的なレベルでこのような場合によく使われるのは「価値」ということばである。ただし、このような場合の「価値」ということばは、よいとか悪いとかいう倫理的な意味合いは入っていない。その文化圏で、ある種の「位置づけ」をされているということである。この意味では、「ことば」もふつうの意味での「意味」という形で、その文化圏での「価値」が定められていると言うことができる。

このような捉え方は「ことばらしいもの」の範囲を一挙に拡大する。「制服」はもともとある一定の職掌にあることを表現し伝達するものとして、いわばわれわれに積極的に語りかけてくる記号であった。このような「物言う記号」の他に——そして、そのようなものよりもっと多く、広きにわたって——われわれは「物言わぬ記号」にもとりかこまれているわけである。

例えば、あらゆる種類の「道具」——人間がもっとも早く創りだした文化的対象の一つ——がそうであるわれわれは自分の文化圏に関してならば、どのようなものがどのようなことをするのに使われる道具であるかを一応知っている。つまり、その文化的な価値が分かる。しかし、異なる文化圏となると、そうは行かない。空間的に隔たりのある文化圏ばかりでなく、時間的に隔たった文化圏を考えてみても、それは十分想像つくであろう。古代人の人類の遺跡を発掘すると、いろいろなものが出てくる。その中には現代のわれわれには単なる「自然」の石ころにしか見えないものが、もしかすると食物となる木の実を砕くという「文化」的な機能を持った道具かも知れないわけである。われわれが考古学者であつたら、文献学者が古い文献を解読するようにそのような文化的な対象を「解読」しなくてはならないわけである。

「解読」から「解釈」へ

以上のように考えただけでも、われわれはまわりの「ことばらしいもの」の範囲は飛躍的に大きくなるはずであるが、これにさらにもう一つ、拡大に連なる要因がつけ加わる。記号を使う主体としての人間は「解釈」をするということである。

このような場合に言う「解釈」は、「解読」という場合と対照して用いられている。後者はメッセージの意味が厳正にコードに基づいて読み取られる場合である。すでに見た通り、例えばモールス信号ではこのようなことが典型的に起こるわけである。そこでは受信者は勝手な「解釈」をすることは許されない。ただ

「機械」的に「解説」するだけである。

しかし、これはすでに見た通り、コードの支配がそれほど完全でない場合は、受信者が人間であればコンテキストを参照するなどして「解釈」を加えながら「解説」しようとする。一応コードが存在しているという建前ならば、受信者は自分の「解釈」を想定されるコードに基づく「解説」と考えられるもののできるだけ近づけようと努力する。コードの存在があやふやであれば、それだけ受信者の自主的な「解釈」の行為の持つ重みが増す。そして究極的にはコードがもともと存在していない——したがって、もともと記号ないし記号によるメッセージが存在していないはずの——場合にでも、人間は主体的に行動する解釈者として意味を読み取ることができるわけである。

すでに取り上げた〈衣服〉をもう一度ここで例として考えてみよう。まず最初に〈制服〉としての衣服は、コードによってその記号内容が明確に規定され、積極的なコミュニケーションを意図する記号であることを見た。そして次に、〈衣服〉一般について積極的なコミュニケーションを意図するものではないが、文化の中で特定の価値をもつ——したがって、一定の記号内容を伴った——記号として捉えることが可能であることも見た。本節で考えているような視点——つまり接する人間の方の主体的な解釈によって対象が記号化されるということ——を取り入れるならば、どんな服でもすべて記号として働きうるということになる。

例えば、電車の中でたまたま向かいに座っている人の服装からでも、その気になればいろいろな意味を読みとることができる。土地の人か旅行者か、どのような職業で、趣味はどうか、これから何をしに行くのであろうか、など、いろいろと可能であるはずである。しかし、このようにして読み取られる意味には、別に社会的なコードによる規定があるわけではない。接する人が自分の判断に基づいて行なっているわけである。

自分の判断に基づいてということは、言い換えれば自分でコードを作成しているということでもある。ある対象を記号表現に見立て、それに対応する記号内容なこのようなものであると、いわば提案しているわけである。時にはこのような過程を繰り返し経験することを通じて、個人的に内蔵されたコードが作り上げられて行くということも起こる。接客経験の多い人によく見られることである。例えば占い師について占って貰いにきた人が「黙って座ればびたりと当てる」と言われる。お客のほうは自分はまだ何も発信していないつもりである。しかし、占い師のほうは自分の経験に基づいて、どのような年輩の人がどのような服装でどのような表情をしてやってくれば、大体こういうことが問題であるということを知っている。お客は意識しないうちに発信者に見立てられ、占い師はそこから引き出せるメッセージを自らが内蔵する——したがって、お客のほうには知られていない——コードでもって解説する。その解説がたまたまあたっていれば、何も発信していないつもりのお客のほうは当然驚くわけである。

もっとも解釈に基づいて作り上げられたコードが個人的に内蔵されるというレベルを越えて、社会的にも認められたコードとして通用するようになることもある。例えば、占星術がそうである。天体に関して観察されるさまざまな現象、それらはもともと人間界の出来事とは相関関係はないはずであるが、そこに何らかの意味を読み込む。そしてそれが体系化された知識としてコード化されると、占星術が成立するわけである。すぐ分かるように、実は人間の学問体系というものはどれもそのようにして成立したものであるということができる。

人間には、もともと「物言わぬもの」まで一挙に「物言う記号」に仕立ててしまう力があるわけである。

記号における「表示義」と「共示義」

人間にとって一定の文化的な価値を持つものはすべて記号であり、また人間には、もともとコミュニケーションをしていないはずの対象までコミュニケーションする記号として見立てることができる」とすると、われわれは文字通り「記号（らしきもの）」に取りかこまれて生活していることになる。

そのような捉え方から出てくる意味合いを考える前に、もう一つ触れておかなければならないことがある。この前の二つの節で「記号」の概念が二つの方向に拡大されるということ考えた。例えば「衣服」

は、一つの場合には、その文化圏で〈身につけるもの〉という記号内容を有するという意味で記号として捉えたと考えた。それから、もう一つの場合には、「衣服」は、それに接する人がそこに何らかの特別な意味合い（つまり「記号内容」）を読みとりうるということを通して記号になりうるということであった。「衣服」が記号として機能していると考えられること二つの場合はどのように関係づけられようか。

ことばの意味作用を考える際に、二つの異なるレベルでの意味作用を想定し、それぞれのレベルにおける記号内容を「表示義」と「共示義」と呼ぶことがある。例えば rose という語が〈ばら〉という意味で使われている場合は「表示義」、〈愛〉という意味合いで用いられている場合は「共示義」ということである。そして「共示義」の場合はその背後に「表示義」が重なっていわば二重写しになるのに対し、「表示義」の場合はそのようなことにはならない。

ところで、「衣服」のようなものが記号として働く場合にも、「ことば」と同じように「表示義」と「共示義」ということを考えることができ、実はそれは「衣服」についての意味の二つの捉え方にそれぞれ相当するのではないかということである。

まず、「衣服」が〈身につける〉という文化的な価値を記号内容として持つ記号として捉えられる場合、これは「衣服」のごく基本的な働きに関することであるから、「表示義」のレベルでの記号化とかがえることができる。「ことば」の場合の表示義と同じように、記号としての「衣服」のこの表示義も、その文化圏の中では一般的に妥当する記号内容である。

これに対し、ある人の「衣服」から例えばその人は〈だらしない〉人であるというような意味合いを読みとるという形で「衣服」が記号化される場合、その記号内容は「共示義」のレベルのものと考えることができる。その場合の意味の読みとりは、われわれの目の前にある対象は〈身につけるもの〉という記号内容（「表示義」）を持つ記号であるということを踏まえて成り立っている記号内容（「共示義」）であるからである。

「ことば」の場合、「表示義」は社会慣習として安定したものであるのに対して、「共示義」はコンテキストに大きく影響され、不安定なものである。これは「衣服」の場合も同様である。〈だらしない人〉という記号内容は特定の場合に働く共示義であって「衣服」がすべての場合にそのような記号内容を持っているわけではない。これは rose という語の〈愛〉という共示義が常に働くのではなく、ある特定のコンテキストの中でのみ働くのと同じことである。

「ことば」の場合、修辞によってどのような共示義を持つかが操作されることがあるのと同じように、「ことば」以外の対象が持ちうる共示義も修辞によって操作されるものである。例えば、「砂糖」はふつう甘味を添える〈好ましい〉ものという共示義を持っているが、糖分を含まない甘味剤が発売、宣伝される場合には、「砂糖」は人を太らせる〈好ましくない〉ものという共示義を持つものとして提示される。あるいは、着古してすりきれた革のジャンパーはふつうなら〈貧しい〉というよくない共示義を与えられるであろうが、ストーン・ウォッシュ・スタイルなどと称して一見そのように見える革ジャンパーが売り出される場合は、逆にそれが〈現代的〉といったよい共示義を持つものとして宣伝されるわけである。

記号と文化

われわれを取りまくおよそさまざまな文化的対象——それは一定の文化的な価値を持つものとして「記号」と考えることができるということ、そしてさらに、われわれはあらゆる対象——文化的なものもそうでないものも含めたすべて——を何かを意味するものとして「記号」として捉えることができるということ、この二つのことから、われわれはあらゆる種類の記号に取りかこまれ、あらゆる種類のものを記号として解釈しながら生活しているということになる。あらゆる種類のものが記号として意味づけられており、同時にあらゆる種類のものを記号として意味づけながら、われわれは生活しているわけである。そのような意味づけは人間の立場からのわれわれ自身にとっての意味づけなのであるから、実は文化そのものに他ならない。記号を作り出すということは、とりもなおさず人間の基本的な文化的営みなのである。

文化のコード

われわれはあらゆる種類の記号に取りかこまれ、それらを解読ないし解釈しながら生活している。ある種の記号のメッセージはそれが基づいているコードが比較的明確であるから、単純な解読で十分である。しかし、別のある種の記号によるメッセージは背後のコードが明確でないから、われわれのほうで主体的な解釈の試みが必要である。

すぐ気がつく通り、この状況はわれわれがことばによるメッセージについて行っていることとよく似ている。ある種の言語的メッセージは比較的明確なコードに基づいて作られているので、簡単に意味がとれる。しかし、別のある種のもの——例えば詩の作品——ではそうは行かない。日常のことばのコードでは解読できないところが多く出てくる。したがって読者が自分で背後にあると想定されるコードを再建しながら——言い換えれば、自らコードを想像するということと並行させながら——、解釈を行うことになる。

このような状況の一つのもっとも極端な場合は、すでに触れたように、空間的あるいは時間的に自らのものとはかけ離れた異文化と接触し、それを解読しなければならないという際に起こる。その状況はちょうど、空間的あるいは時間的に自らのものとは異なる言語で書かれたテキストを解読しようとする際に似ている。言語学者や文献学者が自分の観察できる表現（しばしばそれはきわめて限られたものでありうる）の分析に基づいて背後のコード（つまり、その言語の文法や語彙）を規定しようとするのと同じように、文化人類学者や考古学者も自分の観察できる文化的な現象や対象（これらも、しばしばきわめて限られたものでありうる）の分析に基づいて背後のコード（その文化を機能させている仕組み）を規定しようとする。

限られたデータからコードを再建するという点では、これは一見詩を解釈する場合と似ている。しかし、詩の場合には読者にかなりの自由な創造が許されるのに対して、異文化や異言語に対する場合まず期待されるのは解読であって、コードを自由に創造してみることではない。

しかし、異言語や異文化を解読使用とする人はすでに自分自身の言語と文化についてのコードを身につけ、それによって行動することに慣れている。異文化や異言語に対する際には、自らのコードを当てはめて読みとろうとすることが起こりがちである。そうなれば、対象とされている異文化や異言語は歪められた形で受けとられるということになる。そのような「誤解」は避けられねばならないし、異文化や異言語に接する人は常にその種の危険の可能性を意識し振舞わねばならない。

「文化的テキスト」とその解釈

しかし、また同時に、そのような外からの「誤解」がその文化なり言語なりの内にいる人にとっては気づかれなかったような興味ある点を浮彫りにしてくれることもある。そしてそれがまた、その当事者も気づかれなかったようなことを自らの言語と文化について教えてくれるということにも連なりうる。

正しい理解か誤解のいずれに連なろうと、あるいはまた意外な新しい発見に連なろうと、異文化、異言語との接触からわれわれは次のことを実感をもって体験することができる。つまり、われわれがある一つの文化の中で生きているということは、われわれがあらゆる種類の文化的な現象や対象によって構成されたテキストに囲まれており、それをコードに従って解読したり、あるいは創造的に解釈したりしながら生活しているということである。もちろん「ことば」によるテキストに接し、そこから意味を読み取るというのもその一部である。しかし、大切なことは、われわれのまわりにはもっともっと多くの他の「ことばらしいもの」によるテキストが存在しており、われわれはそれを解読し、解釈するということをしているということである。このような状況は、われわれが記号の世界に住んでいるということを確認し、そしてその記号の世界の営みのもととなっているコードとは如何なるものであるか、そして、その世界における営みを通じて既成のコードそのものが考えられ、新しいものへと変貌して行く創造的な仕組みがどこに位置づけられるのかという記号論の視点からの考察によって、新しい光が投げかけられるのではないかと考えられるのである。文化記号論は「ことばとしての文化」という視点から、その文化を機能させている「コード」に関心を持つのである。

〈注〉

時間の制約で今回はとりあえず「文化記号論」の基本的な考え方を提示するだけにとどめた。

著者プロフィール

池上 嘉彦（いけがみ よしひこ、1934年2月6日－）は、日本の言語学者、東京大学教養学部名誉教授、昭和女子大学大学院特任教授。専門は記号論・意味論・詩学。

1956年東京大学英語英文学専修課程卒業、同大学院修士課程修了。1963年より助手。以後、東大教養学部にて定年まで勤務。アレクサンダー・フォン・フンボルト財団およびフルブライト・プログラムの研究員となり、西ドイツ、米国、英国に滞在する。1969年イェール大学で言語学の博士号を取得。ミュンヘン大学、ロンドン大学客員教授、1985年東大教養学部教授。1995年の定年後は、昭和女子大学大学院教授、のち特任教授。東大名誉教授。2000年に設立された日本認知言語学会初代会長を務める。

日本文化研究的态度与方法

吉林大学 宿久高

“日本文化”是一个比较宽泛的概念，分狭义和广义两种：狭义上的日本文化主要指歌舞伎、能、茶道、花道、祭祀等日本特有文化；广义上的日本文化则指日本人的思维方式、行为方式、生活方式及民族性格等。日本文化作为一个研究领域，主要研究对象应该是，在与其他文化背景的人群相比之下，作为日本文化主体的日本人的思维方式、行为方式、生活方式、民族性格等所凸现出来的不同特征，重点回答如何定位日本文化和日本人性格的整体性思考，以及其产生、发展、演变的独特的社会历史背景。

众所周知，日本文化在其发生、发展历史过程中，很大程度上受到了中国文化的影响，古代乃至当代的日本文化中，含有大量的中国文化因素。从某种意义上说，中国的古代文化是日本文化的母体。

在两国的交流史上，我国对日本的研究，早在100多年前就开始了。但是，中国的知识分子（研究者）自古有一种中华文化的优越感，对日本历来抱有轻视的态度，有时候愿意想当然，不愿意花大力气对日本文化进行认真的了解和深入的研究。到了近代，直到日本明治维新成功和中国在甲午战争中失败，才迫使中国朝野开始关注日本，但是，大部分人骨子里仍然存在中华尊大思想。

二十世纪三四十年代，日本帝国主义疯狂地对外扩张，发动侵华战争，给中国人民带来了深重的灾难，中国人民由此产生的耻辱感和仇恨心理，成为很长一段历史时期的群体记忆。由于上述种种原因，近代中国对日本文化的研究，在相当长的一段时间内缺乏客观性。

1972年中日邦交正常化以后，尤其是改革开放以后，我国的日本文化研究不断深入，取得了可喜的成果，但是还仍然存在功利性、不深入、不全面，缺乏科学性等问题。

研究日本文化的态度

一、以“公正”的态度研究日本文化

纵观日本明治维新以后的历史，从“脱亚入欧”到“国粹主义”，从对外扩张和发动侵略战争，再到“日本模式论”，形成了三大文化主题。这三大主题，对日本人文化认同的确立发挥了重大作用，支撑了日本150年的发展。如果说明治维新的“脱亚入欧”是日本民族意识的觉醒与发展，国家由此走向军国主义，那么其终点便是对外扩张和发动侵略战争。在第二次世界大战中的失败（从某种意义上说，失败是“脱亚入欧”的民族意识觉醒后的错误走向的必然结果），迫使日本在战后初期开始进行文化反省，而战后的经济崛起，国力的增强，又使得日本开始了日本模式的张扬。时至今日，极端的民族主义情绪充斥日本，重返“正常国家”的呼声不绝于耳，从日本文化的发展过程来看，其走向不得不令人感到忧虑。

不拘怎样，作为亚洲唯一的发达国家，世界第三大经济体，日本是一个值得研究的国家，日本文化是一个非常具有研究价值的领域，正像周作人先生所说：“我们无须一味地学习日本文化中优秀的部分，而无视或容忍其丑恶的行径。”“我们当立于两者之上，一面礼赞它精美的文化，一面对于它强暴的盲动力加以反抗。”“把它当作一种民族文明去公平地研究，以资我们的利用。”

二、客观、全面、深入地研究日本文化

所谓客观，即不带有色眼镜，不凭空想象，不只凭经验，而是要有理论指导。日本是个岛国，日本人长期被迫生活在一种与世隔绝的“孤立状态”中，正是这种“孤立状态”，使日本人具有一种强烈的自我意识和危机意识，比其他民族更有可能根据自己的意愿，以自己的方式去寻求发展，迫使他们创造出具有自己显著特征的文化。

从一般意义上说,日本传统文化有三大支柱,即三大民族心理:一是渴望成为强者心理;二是务实心理;三是“忠诚”心理。渴望成为强者的心理,使日本民族崇拜强者,特别渴望成为强者,为了成为强者而不择手段;无视弱者,鄙视弱者,为了欺负弱者而丧失人性。务实心里使日本民族孜孜以求,踏实勤奋,精益求精,吃苦耐劳。“忠诚”心理使日本民族把效忠天皇、效忠国家的传统的民族价值观转化成对与个人生存息息相关的企业的忠诚,凝心聚力,无私奉献。这种独特的文化无疑促进了日本经济的发展。

我们要客观、全面、深入地研究日本文化,探究日本文化特征的本质,汲取日本文化的可贵之处,为我国的经济、文化建设服务。

三、既要异中求同,更要同中求异

中日两国同属东亚文化体系,同属汉字文化圈,在文化上有着悠久的历史渊源,一般被认为中日两国是“同文同种”。其实这是一个很大的误解。

日本文化虽然和中国文化有着千丝万缕的联系,但本质上是完全区别于中国文化的异质文化。就日本文化发展的历史而言,镰仓武士政权建立以后的数百年间,日本一直处于锁国状态,中日两国间以贸易为主要形式的民间交流虽然没有间断,但国家层面的交流几乎不曾有过。对于日本文化的发展和成熟而言,这一历史时期是非常重要的。就在这闭关锁国的几百年里,日本将自奈良、平安朝时代大量输入的中国文化进行摄取、消化、吸收、改造,进而结合自己独特的文化、自然环境,创造出了富有自己民族特征独特的文化,完成了传承至今的文化类型。这些文化特征,在文化、文学样式、审美理念等方面表现得尤为突出。正如周作人先生所言:“虽受到了中国的影响,但他们的纯文学,却仍有一种特别的精神。”《源氏物语》的“物哀”、《新古今和歌集》的“妖艳”、“纤细”,芭蕉的“枯寂”等,加之这期间形成的“武士道精神”,都成为日本文化的灵魂和重要的精神内核,至今深刻影响着日本人的思维方式、行为方式、生活方式和民族性格。所以,我们在研究日本文化时,有必要从它与中国文化似乎相同的表象深入进去,去研究其完全区别于中国文化的不同之处,以及这些不同之处的形成、发展过程,从而揭示日本文化独特的本质特征。

四、要确立研究的主体性

如前所述,中日两国文化交流的历史源远流长,同属于汉字圈文化,有着诸多相同、相似之处和千丝万缕的联系,但一个毋庸置疑的事实是,中日两国都有着各自不同的历史与文化。同是相对的,不同是绝对的。

我们在研究日本文化的时候,首先要对本国的历史和文化有深刻的理解和认识,有丰厚的理论和知识储备,这是研究的前提和根本。只有对本国的历史和文化有正确的、深刻的理解和认识,在研究日本或他国文化的时候,才能树立起一个参照体,并把这个参照体作为衡量日本文化之所以与中国文化相同、相似或不同的标杆和尺度,从而去思考为什么相同、为什么不同的历史原因,去探究这种相同或不同的实质。所以,在研究日本文化时,不能人云亦云,不能不加分析地肯定或否定既有的研究成果。要确立研究的主体性,同时汲取日本文化中的优秀部分,以丰富本国的文化内涵。

研究日本文化的方法

一、接近“文化事实”的原则

文化的比较研究一般有两个方面,那就是平行研究和影响研究。平行研究是相同或相似的文化现象在同一个时代,在不同的国度或不同的民族文化中表现出来时,对这种现象之所以产生的背景、原因、规律、个性和普遍性进行的研究;影响研究是同一文化现象在不同时代、不同国度的文化中出现时,前者对后者的影响研究。平行研究是横向研究,影响研究是纵向研究;平行研究是同步的,影响研究是继起的,有时甚至是跨时代的。

文化的比较研究也有一个方法论的问题。目前,就中日文化的比较研究而言,无论是平行研究还是影响研究,都出现了一些富有创新意义的研究成果。但是,在方法论方面,仍然存在着某些严格意义上的非学术研究的倾向。这种倾向主要表现在:结合某一个研究命题,事先设定某种结论,在论述的过程中根据结论去